

# 歩兵第十六聯隊のノモンハン事件参戦

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

昭和十四年、第二師団は司令部を牡丹江東方の液河に置き、第八・第十二師団と共に最強師団として関東軍第三軍に属し、東部満ソ国境方面の防備に任じていた。

我が歩兵第十六聯隊主力は、僚友聯隊たる歩兵第三十聯隊と共に液河東方の風光明媚な穆稜（ムーリン）に駐屯し、第三大隊は優良炭鉱の所在地、梨樹鎮に分屯していた。

ノモンハン事件とは、昭和十四年五月十二日朝、突如ハルハ河を不法渡河越境した約七百名の外蒙軍（ソ連軍）に端を発し、遂次拡大、東支隊、山県支隊の戦闘となり更に第二十三師団（熊本）の戦闘に発展した。（又、ハルハ河事件とも言われています）

事件という小規模な感じに受けますが、ソ連軍の機械化部隊により壊滅的な打撃を受け死傷者約二万余に上る大規模な武力衝突でした。

当初、関東軍第二十三師団を中心に戦っていたが、八月下旬には悪戦苦闘の最高潮で、その戦闘力を消耗し尽くし、ついに第二師団・第四師団・第七師団を第六軍に増加配属するに至り、八月二十五日、各師団に応急派兵が命ぜられた。

第二十三師団の危急を救うべく聯隊は、二十八日に満洲の穆稜駐屯地を出発した。梨樹鎮に分屯していた第三大隊には電話で命令を傳達し、更に特使を急派した。

当時の聯隊長、宮崎繁三郎大佐は三月七日着任したばかりで、聯隊主力の編成は平時編成であったため、戦時下の半数以下での派兵となり、歩兵一個中隊が百名不足でした。（戦時編成であれば二百五十名）

そこで聯隊長は将校全員を集合させ「平時訓練ノ真価ヲ發揮スルハ正ニコノ秋ニ有リ」と激励し、一路西進することとなった。

聯隊は片山支隊（高田第十五旅団長）の先頭部隊となり、穆稜～昂々溪～白城子～ハロン・アルシャン温泉間を三晩四日、鉄道輸送により移動し三十一日到着、下車と同時に「小松原兵团（第二十三師団）ハ危急ニ瀕ス、貴兵团ハ、ドロド湖西北方地区ニ急進スベシ」の軍命令に接し、休養することなく到着部隊ごと昼夜兼行にて急進した。

この時の聯隊前進命令要旨は次の様なものでした。

\*\*\*

- 一、 「ノモンハン」ノ友軍ハ危急ニ瀕シアリテ我ガ聯隊ノ到着ヲ一日千秋ノ思イニテ待チツツアリ。
- 二、 聯隊ハ万難ヲ排シ「ドロド」湖西北方ニ向カイ急進スル。
- 三、 各部隊ハ「ハロン・アルシャン」ニ到着後、下車部隊毎即刻先任者指揮ヲ以ッテ「ドロド」湖西北方地区ニ向カイ急進セヨ  
「注意」落伍者アルモ意ニ介スルコトナク急進ヲ敢行スルコト。

\*\*\*

以上の命令に接し、各部隊はハンダガヤを経て、丸三日間を驚異的な行進速度（ほぼ駆足）で目的地に到着した。落伍者は相当に出たが、一日以内に各原隊に追及し得た。

この行軍間、連日遙か西北方に殷々たる砲声を聞き、将兵一同血湧き肉躍るの感があった。又、時に敵機が我が頭上に飛来することもあったが、損害は殆んどなかった。

この行軍の行程を第四師団（大阪）に至っては、我が聯隊が三日にて前進せし距離を、一週間も要して漸く前進した。聯隊の行軍能力の如何に優秀かが明瞭であると、宮崎氏は後に語っている。

九月四日、聯隊は同地付近を防備していた満州国軍と交代した。

聯隊長は、敵情地形並びに我が軍の兵力の関係上、当面の敵を攻撃するには夜襲に限ると判断し、「準備周到」をモットーとして、夜襲実施に関する諸準備を十分にした。

即ち敵陣地の状況を良く各方面より偵察し写景図を作り、これに詳細な符号、注記を附し聯隊将兵に徹底せしめ、予め夜襲部隊にその任務を決定し、隠密裏に更に細部の敵状地形を詳細に偵察せしめて、何時にても直ちに実行に移れるように万全の処置をして時の至るのを待っていた。

九月八日、ノモンハン初戦を得意の夜襲により目標を攻撃するに決し、聯隊は主力を以って東山高地、一部を以って秋山高地・九九七高地を奪取せんと行動を開始した。

第五中隊は予定の如く行動開始、大なる敵の抵抗も無く、秋山高地を午後十一時奪取し得た。

第一大隊は日没と共に行動を起こし、東山高地に突進、山腹諸所に敵兵天幕を張り露営しあるを発見、一部を以って急襲、主力は山頂めがけ猛進した。先頭小隊長は率先奮戦し敵兵三名を斬殺したが、敵手榴弾のため壮烈な戦死を遂げた。

敵の抵抗は遂次猛烈となり、夜襲は全く強襲となり、熾烈なる重・軽機・手榴弾・擲弾筒の発射及び破裂音で、東山高地一帯は騒然阿修羅場と化し、九日午前三～四時頃まで勝敗不明の状況であった。

第一大隊の奮闘により、遂次敵を圧倒し九日払暁に至り本部高地より望見すれば、敵兵の敗退する状況が手に取る如く明瞭であった。

九月九日、予備隊の第二大隊は、第五・第六中隊を第一線として、遮蔽物のない大草原を堂々南山高地に向かい攻撃前進をしていたが、東山高地数百メートルに接近する頃、敵戦車続々我が方に前進し来るを見る間に二十台、三十台、五十台以上となった。

連隊長は第一大隊及び聯隊砲、速射砲中隊に極力第二大隊の戦闘に協力し敵を撃滅すべきを命じた。

最終敵戦車は、その数百数十台となり第二大隊に接近して一斉に砲撃を開始、その有様は実に凄絶至極であった。

敵戦車砲撃開始後十分足らずで、正面約六キロメートルの戦線は火の海と化し、全戦線は大煙幕に覆われた。戦場は一面草原で生木生草が砲弾炸裂のため忽ち引火し燃え始め、大隊は猛火の中悪戦苦闘の戦闘を余儀なくされた。

聯隊は肉薄攻撃班を多数派遣したが、戦車砲、機関銃の猛射を受け、僅か二両の攔控であった。聯隊砲、速射砲での戦果は六両攔控せしめた。

幸い敵戦車は我が一線の三百メートルより前には接近せず砲撃するのみであり、迅速に工事をし得た第五、第七中隊方面は比較的損害は少なかったが、工事実施困難だった第六中隊、第二機関銃中隊、大隊本部の位置した付近は多大な損害を蒙った。

然しながら一度占領した位置を最後まで一步も譲らずこれを確保した。本戦闘間殆んど敵機の来襲が無かったのも幸いであった。

九日午後四時頃、支隊の予備隊であった第三大隊、野砲兵第二大隊が我が戦線に増加され、敵戦車軍に猛射を浴びせた。第三大隊が第二大隊の戦場付近に進出した頃、敵戦車部隊は西南方に向かい一斉に退却を開始した。

砲兵大隊は射程八千まで追撃射撃を継続、第三大隊は直ちに追撃に移ったが、時既に夕日没せんとし、聯隊長は日没を持って追撃中止現在地付近に停止を命じた。

九日、日没より翌日まで戦場整理に努力し概ねその目的を達した。聯隊はその後、第三大隊を第一線とし、戦闘準備を着々と進めていたところ「日満軍及ソ蒙軍ハ九月十六日午後二時ヲ期シ、一切ノ軍事行動ヲ停止ス」との停戦協定が成立し、九月十六日、突如戦闘中止の大命が下った。ここに、五月以来紛争を極めたノモンハン事件も終了した。

本戦闘において、聯隊は第二大隊長、第二機関銃中隊長以下戦死傷者約二百名を出し、九月二十六日、片山支隊戦場慰霊祭を施行して、十月中旬ハンダガヤを経てハロンアルシャン駅にて乗車、原駐屯地、穆稜及び梨樹鎮に帰還した。

その後穆稜に駐屯すること一年、満州派遣の任を解かれ、昭和十五年十月十日、一路内地へと向かい、十月二十八日、懐かしの菖蒲城に帰還した。

(新発田聯隊史より)

～余談～

昭和四十四年五月、当時の聯隊長 宮崎繁三郎氏より新発田駐屯地史料館開館時、数多くの手記及び資料を提供して戴きました。この中で「新発田聯隊は、敵数百両の戦車を相手に一步も引かず、唯一勝利した聯隊であった」と語っています。

九月八日、得意の夜襲戦法をもって占領した第一線に、停戦後聯隊内で石工の心得のある者を集め、岩石に「二五九九」（紀元年で昭和十四年のこと）「日本軍片山部隊 九・十六誌之」（当時第十五旅団長、片山省太郎少将）と彫らせ、占領していた要点に証拠として十数個埋めてきた。これが停戦後の日満ソ国境確定委員会において有力な証拠となった話は有名です。

又、宮崎氏は部下の戦死の回想で、第二大隊機関銃中隊長、浅井公輔大尉佩刀の軍刀は元禄十五年、赤穂浪士四十七士の討入の際、大石良雄（大石内蔵助良雄）が吉良邸に討ち入った際使用した由緒ある名刀で大尉が自慢のものであった。当時国宝に手続き中で近く決定される運びであった。大尉は敵の戦車砲の全弾を体の真ん中に受け跡形もなく四散し壮烈な戦死を遂げたと回想しています。

宮崎聯隊長は、後に第五十四師団長（中部軍）として終戦をむかえました。